E-2

ナガミーズ語の借用語音韻論と多重語の形成

村上武則

(要旨)
ナガミーズ語はアッサム語における母音の長短の対立の喪失や反舌音の消失などの特徴を引き継いではいるがナガ諸語に元々無い鼻母音や有声帯気音や軟口蓋摩擦音は取り入れず、ヒンディー語やベンガル語から破擦音を取り入れて音素とした。これらの複数の起源からの借用語はナガミーズ語の内部において多重語を成している。

(予稿)

0. ナガミーズ語について

ナガミーズ語 (Nagamese) は現在のインド北東部においてインド・アーリア系のアッサム語 (Assamese) とチベット・ビルマ系のナガ諸語 (Nagaic, Central and Southern Naga) およびコニャク諸語 (Konyakian, Northern Naga) との接触の過程で生まれたピジンを起源に持つと考えられるクレオール言語である。インド北東部アッサム州から 1963 年に分離したナガランド州 (Nagaland) 内で最も広域に通用する非公式な共通語として 20 を超える民族からなる州民に話されており、ナガランド州に隣接するマニプル州、アッサム州、アルナーチャル州、ミャンマーのザガイン管区などにも話者が存在しているがその数は多くは無い。ナガミーズ語はその形成において主にアッサム語を語彙や文法の供給源としているが、近年連邦公用語であるヒンディー語の影響力の増大により語彙のヒンディー化が進んでおり、またアッサム語ともヒンディー語とも異なった、語形としてはベンガル語に近いが借入源の同定が難しい同語根語も少なからず存在している。しかし基層言語であるナガ諸語・コニャク諸語由来の語彙は固有名詞やそれに準ずる特殊な用語を除いてほとんど確認されない。そのためアッサム語またはベンガル語とナガミーズ語との間にはある程度の相互意思疎通性が保たれている。ナガミーズ語はナガランド州内において民族分類上「ナガ」に属さないチベット・ビルマ系の少数民族である先住民のカチャリ人 (Kachari) や南のマニプル州側からナガランド州南西部に移動してきたクキ人 (Kuki) にも話されており、特にカチャリ人は既に母語の継承が難しくなっているためナガミーズ語あるいはヒンディー語を母語とする者の方が多数派になっていると見られる。現代のナガミーズ語はナガ系諸民族の各言語の表記と同じくキリスト教の宣教師らによって導入されたローマ字アルファベットを用いて記されるが、20 世紀前半以前の文字資料は探検家や植民地官僚の断片的記録を除いてほぼ皆無と言って良く、新聞や書籍などの出版物が継続的に流通し始めたのは 2010 年代以降のことである。広告や看板などにおいてもナガミーズ語が書かれることはほとんど無かったが、2020 年に始まる COVID-19 パンデミック下の状況においてナガミーズ語の感染予防啓発メッセージが文字と音声の両方で発信されるようになり、また主にニュース解説・政治評論・宗教などのジャンルの YouTube チャンネルが激増し、インターネット上のナガミーズ語の言語状況は一変した。

ナガミーズ語は地域的・民族的に様々な下位変種が存在するが、本発表の元になった調査は主に地域的には南部の州都コヒマ市およびその周辺に分布する、民族的にはアンガミ・マオ変種である。

1. ナガミーズ語の借用語音韻論

ナガミーズ語の語彙は 99.9%以上がインド・アーリア諸語と英語に由来する語彙によって構成されており、ナガ系諸民族語由来の語彙は固有名詞やそれに準ずる動植物名、ナガ社会固有の伝統を表す特殊で翻訳の難しい用語 (genna「慣習法」、hoho「集会組織」など) を除いて使われることは無い。井上 (2009), p. 284 などに見られる以下のような説明は誤りである。

> 異なるナガ諸民族の間の共通語としては、英語か、アッサム語を柱にナガ諸民族語を混ぜたナガミーズ(Nagamese)と呼ぶ言語が使われる。(傍線部は発表者による)

しかし基層言語の固有語が使われていない、使用語彙のほぼ全てが借用語によって構成されている言語において「借用語音韻論」とは何を指すのであろうか。それはドナー言語とホスト言語それぞれの音韻体系の対照によって何がどのような形で借入され、何が受け容れられなかったのかといった借用の在り方を通して確かめられる一貫した音韻的特徴のことである。

1.1 アッサム語とナガミーズ語の音素目録

ナガミーズ語の音素体系はおおむねアッサム語のそれを単純化したものであると言えるが、アッサム語が歴史的に失った破擦音の再獲得という点においてのみアッサム語よりも複雑化している。

アッサム語	ナガミーズ語
/ɔ/, /a/, /i/, /u/, /e/, /ɛ/, /o/, /ʊ/, 鼻母音	/a/, /i/, /u/, /e/, /o/
/k, kʰ, g, gʱ/, /ŋ/	/k, kʰ, g/, /ŋ/
/s/, /z/	/s/, /tɕ/, /dʑ/
/t, tʰ, d, dʱ, n/	/t, tʰ, d, n/
/p, f, b, bʱ, m/	/p, f, b, m/
/r, l/	/r, l/
/x/, /h/	/h/
/j/, /w/	/j/, /w/

アッサム語、ベンガル語の属する東部インド・アーリア諸語 (Eastern Indo-Aryan, EIA と略) のガウダ・カーマルーパ諸語(Gauda-Kamarupan)においては古期インド・アーリア諸語 (Old Indo-Aryan, OIA と略)に存在した母音の長短の対立は失われ、/i/ や /u/ の長短対立は存在せず /a/ と /aː/ の対立は /ɔ/ と /a/ の対立に変化している。また、アッサム語には他のインド・アーリア諸語の大多数に見られる破擦音と反舌音が音素として存在しない。

1.2 母音の単純化

Asm. /ɔ, o/ > Ngm. /o/ ([o]~[ɔ])
Asm. /u, ʊ/ > Ngm. /u/
Asm. /ɛ, e/ > Ngm. /e/ ([e]~[ɛ])

ホスト言語側ではナガ諸語に属するアンガミ・ポチュリ諸語の一部以外は概して母音体系は単純であり、ナガミーズ語もアッサム語の複雑な母音体系を引き継いでいない。ホスト言語側には /u/ と /o/ の区別が無い言語も含まれるため混同も見られるが音素としては区別される。
例. pura「完全な」vs pora「～で、～から、～によって」

1.3 ホスト言語側に存在しない音素の合流
ナガミーズ語にはアッサム語に存在した鼻母音と有声帯気音が音素として存在しない。これは、ホスト言語側にそのような音素を持つ言語が存在しないことに従っていると見られる。

アッサム語には鼻母音が存在するが、これらはナガミーズ語に移入された際に鼻音性を喪失するか、母音と鼻子音の組み合わせに置き換えられる。

Asm. /dãt/ > Ngm. /dat/「歯」
Asm. /gãu/ > Ngm. /gaun/「村」

アッサム語には有声帯気音の子音系列が存在するが、これらはナガミーズ語に移入された際に帯気性を失う。

Asm. /bʱag/ > Ngm. /bag/「部分」
Asm. /dʱatu/ > Ngm. /datu/「根」
Asm. /gʱõra/ > Ngm. /gora/「馬」

ナガミーズ語の話者はヒンディー語の学習を通してこれらの有声帯気音を調音し発声することは可能であり、書き言葉では語源的綴りとして <bh, dh, gh> のようにも書かれ実際に有声帯気

音として実現することもあるがナガミーズ語において一貫した音素としては認められず、[bʱ], [dʱ], [gʱ] はそれぞれ /b/, /d/, /g/ の異音と見做す。また、パンジャービー語、シレット語、ベンガル語チッタゴン方言、チャクマ語などに見られる有声帯気音の喪失に伴った声調や高低アクセントの獲得といった現象もナガミーズ語には見られない。

アッサム語の /x/ と /h/ はナガミーズ語では /h/ に合流する。これもホスト言語側に /x/ を独立の音素として持つ言語が無いことと対応しており、アッサム語諸方言の口語でしばしば /x/ が [χ] や [h] で実現されることをも反映している可能性がある。アッサム語の /x/ 音は OIA の /s, ʃ, ʂ/ といった s 系統の音が変化したものであるが、ナガミーズ語ではアッサム語以外の借用源から移入された s 系統音を全て一つの音素 /s/ として数える。

1.4 破擦音の獲得

アッサム語には破擦音が存在せず、OIA の /c, cʰ/, /ɟ, ɟʱ/ は それぞれ /s/, /z/ に変化している。しかしナガミーズ語は破擦音を残しているヒンディー語あるいはベンガル語、アッサム語の非標準変種から /tɕ/ を獲得したと考えられる。ただし帯気音の [tɕʰ] は一貫した音素として認められず、/tɕ/ の異音の扱いとなる。これはホスト言語側でも特にマニプル州寄りの地域に /tɕ/ と /tɕʰ/ がペアを成さない言語が複数存在していることと対応している。

Hin. /tɕʰa:ta:/ > Ngm. /tɕata/「日傘」
Hin. /tɕela:/ > Ngm. /tɕela/「徒弟」
Ben. /nitʃe/ > Ngm. /nitɕe/「下に」:

一方でナガミーズ語の /dʑ/ ([dʑ]~[z]) はアッサム語の /z/ と同じものとして見做して問題無く、ヒンディー語やベンガル語の有声帯気音に対応する [dʑʱ] も音素としては認められない。

Hin. /dʑʱa:ɽu:/ > Ngm. /dʑaru/「ほうき」

1.5 シュワー /ə/ の扱い

ナガミーズ語において基本的に [ə] は /a/ の異音であって独立の音素としては認められない。借用語に [ə] が含まれている場合には全て /a/ にいったん置き換えられる。これは借用語においてもアッサム語・ベンガル語でヒンディー語の /ə/ を全て /a/ に置き換えるのと同様である。

Hin. /bəɕɕa:/ > Asm. /bassa/, Ben. /baʃʃa/ > Ngm. /baɕa/ (/basa/ にはならない)

2. 多重語の形成

前節 1. での議論を踏まえた上で、ナガミーズ語において複数の借用源からの語が多重語 (multiplet) を成していることについて論じる。

2.1 アッサム語の Tatsama (Ardhatatsama) と Tadbhava をそのまま引き継いでいる場合

Skt. /puːrʋa/ = Asm. /purbɔ/ > Ngm. /purbo/「東」「過去の、以前の」
Asm. /pub/ > Ngm. /pub/「東」

2.2 アッサム語と他の EIA 由来の /h/ vs /s/ 対立

Asm. /xɔməj/ > Ngm. /homoi/「時間」
Ben. /ʃɔməj/ > Ngm. /somoi/「時間」

Asm. /xɔbʱa/ > Ngm. /hoba/「集会」
Ben. /ʃɔbʱa/ > Ngm. /soba/「集会」

Asm. /xex/ > Ngm. /heh/「終わり」
Ben. /ʃeʃ/ > Ngm. /ses/「終わり」

/h/ 形であっても /s/ 形であっても意味に違いは無いがおそらくは地域的に分布の違いがある。

2.3 アッサム語とヒンディー語由来の /h/ vs /s/ 対立

Asm. /xanti/ > Ngm. /hanti/「平安」
Hin. /ɕaːnti/ > Ngm. /santi/「平安」

Asm. /xɔkti/ > Ngm. /hokti/「力」
Hin. /ɕəkti/ > Ngm. /sakti/「力」
ただし複合語では /hoktiman/「力を持つもの」はあっても /saktiman/ は見られない

2.4. アッサム語とヒンディー語由来の /s/ vs /tɕ/ 対立

Asm. /sirija/ > Ngm. /sirija/「鳥」
Hin. /tɕirijaː/ > Ngm. /tɕiriya/「鳥」
両者は同じ語で破擦音の /tɕ/ が /s/ に変化したアッサム語形と、破擦音の /tɕ/ を保っているヒ

ンディー語形が両方ナガミーズ語に移入されてダブレットを成している。

さらに語源が同じとおぼしき
Asm /sɔrai/ > Ngm. /sorai/「鳥」もナガミーズ語の中に存在し、トリプレットを成す。

2.5 ナガミーズ語内部での音位転換が起きたと見られる例

Asm. /prɔbʰu/ > Ngm. /prabu/「創造主」 vs /porbu/「創造主」

Skt. /sʋapna/ = Asm. /sɔpnɔ/ > Ngm. /sopon/「眠り」
Asm. /xɔpʋn/ > Ngm. hopun「眠り」

(参考文献)
井上恭子「インド北東地方の民族運動: ナガ民族について」、近藤則夫編『インド民主主義体制のゆくえ：多党化と経済成長の時代における安定性と限界』277-309、アジア経済研究所 2008
Boruah, Bhim Kanta, *Dictionary of Nagamese Language : Nagamese-English-Assamese*, Mittal Publications, New Delhi, 2014